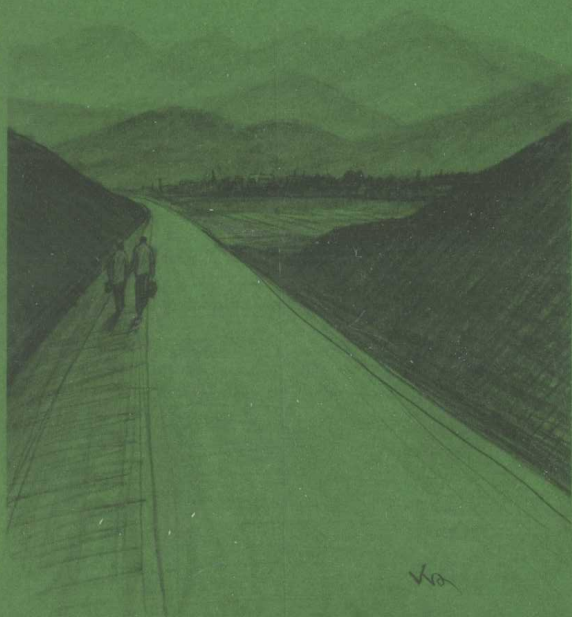




五木寛之

青春の門

再起篇

下

講談社

青春の門 第六部 再起篇 下 定価 九八〇円

著 者 五木寛之

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一
〒一―一二 振替 東京八―三九三〇
電話 東京(〇三)九四五―一二―二(大代表)

印刷所 豊国オフセット株式会社

製本所 大製株式会社

第一刷発行 昭和五十五年十二月十五日



©五木寛之 一九八〇年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。

目次

故郷の川を抱いて	5
欲望の街で	43
帰らざる人びと	81
暮れてゆく遠い道	117
カオルの旅	144
二つの世界	155
答のない問いかけ	198
別れの秋	211
終りなき出発	232

表紙絵

さしえ

風間 完

題字

菅 甘林

装幀

村山豊夫

青春の門

再起篇 下

故郷の川を抱いて

夜だった。どこかで重い爆音がきこえていた。ジェット機の爆音のようでもあり、また得^え体の知れないものの遠^{とほ}吠^{はい}えのようでもあった。

信介と織江は、アパートの一室で卓^{ちゃ}袱^ふ台^{だい}を前に向き合って坐っていた。織江は白いTシャツにGパン、信介はバジャマ姿だった。織江のTシャツを下からふくよかに持ちあげている乳房の形が、ゆっくりと息づいていた。彼女は新聞を読んでいる。呼吸をするたびに胸のふくらみは生きもののように形を変える。

信介はそんな織江の女らしい体の線を、見るともなしに目の端^{はし}で眺^{なが}めていた。

欲望、というほど露^ろ骨^{こつ}ではないが、信介の体の奥に次第に熱く頭をもたげはじめ^{しやうどう}る衝動がある。彼はそれを押さえこむように大きく背のびをして、あくびをした。

「疲れたなあ。どうしたんだろう。大した仕事もしていないのに」

「年じゃない？」

と、織江は新聞の社会面に目を走らせながら言った。

「信介さんも、少しずつ年をとっていくんだわ。そして、いつかは宇崎先生みたいな、意地っばりのオジイちゃんになるのよ」

「年、とはなんだ。そんな言いぐさがあるか」

「だって、二十歳をすぎたら、もうオッさんなんですって。最近の若い人たちにとって、はね」

「織江だって、それじゃ、いいオバはんじゃないか」

「そう。最近つくづくそう感じるわ」

「冗談じゃないぜ」

信介は少し気色ばんで、

「おれたちは、まだ青臭いヒヨッコなんだ。今頃から年だなんて言ってて、どうなる」

「はい、はい」

織江は逆らわずに新聞をたたむと、

「ね、信介さん」

「なんだい」

「九州のほうも、なんだか大変みたいよ」

「何か記事でも出てるのかい」

「うん。筑豊でまた落盤事故があったんですって」

「へえ。人が死んでるのか」



「六人ほど坑道にとじこめられてるらしいわ」

「そうか」

信介は頭のうしろに手を組んで、ただみ畳の上にひっくり返った。

「六人か——」

「いやねえ」

織江はたちあがると、卓袱台の横を回って、信介の横にやってきた。そしてそのまま信介と同じような姿勢で、彼によりそうと畳の上に寝転ねころんだ。

「あたし、子供の頃のこと、今でも思い出すわ。夜中にサイレンが狂ったように鳴って、みんながはだして駆け出して行くの。鐘が鳴ったり、犬がほえたり、暗い夜の中にライトがジグザグに走ったり、あの時のことを思い出すと今でもぞっとする。事故って、ほんとにこわいわ」

「うちの親父おやじも坑道の中で死んだんだ」

信介は、目をつぶって、父親、重蔵じゅうぞうの姿を思い浮べた。ダイナマイトを体にくくりつけて暗い坑道をゆく一人の男のうしろ姿が頭の中に見えてきた。

「あたしたち、まだ運のいいほうかもしれないわね」

ぽつんと織江が言った。

「なぜだい」

「だって、歌をうたって、それで食べていけるなんて、幸せだと思わない？」

「まあな」

「好きなこととして生きてるのよ。そりゃ、お金に縁のない生活だけど、ほかの人たちが命がけで辛つらい

仕事をしてる時に、ステージで何曲か歌って、時には拍手ももらって、それでお金を稼ぐんですもの。たとえ無名だろうと、人気スターになれなくっても、それはそれで幸福だと思うわ。でも、こんなことを考えてるから、あたしは売れないのかもしれないなあ」

「うん」

信介はうなずいた。織江の言うことは、両方とも本当のように思えたのだ。歌をうたって食べていくということは、たしかに恵まれたことにちがいない。だが、その反面、その生活に満足していることが、織江をいつまでも売れない歌手の立場に置いているのかもしれない。

「こっちへこいよ」

と信介がぼつんと言った。そして、片腕をのぼし、織江の頭をすくうようにした。

織江は、信介のさし出された腕に、素直に自分の頭をあずけた。九州のことを話し合ったことで二人の間に、なにか急に子供の頃のような親密な感情がうまれたようだった。

「昔、中元寺川の草の中で、こんなふうに並んで寝てたことがあるのを、信介さん、おぼえてる？」

「さあ」

「信介さんたら、あの頃からませてたんだから」

「嘘だよ。ませてたのはそっちのほうさ。小学校にあがる前から、もう結構、色気があったもんな」

「いやだわ。変な言いかた——」

「いつか、きみとお医者さんごっこしたことがあったのを、おぼえてるかい」

「お医者さんごっこ？」

「うん」

「やめてよ」

織江は信介の腕の中で、くっくつと体を曲げて笑い、くるりと寝返りをうつようにして信介の胸に背中を押しつけてきた。

「信介さんのほか。おかしなことばかり思い出させて」

「だって本当だろ」

「おぼえてるわ」

と、織江は言った。

「あのとき信介さんが変なことするんだもん、あたし、こわくて死にそうだった」

「嘘だよ。うれしそうに協力したじゃないか」

「もう、いや」

織江は体を震わせて笑いながら、信介の腕の中で生きた魚のようににはねた。彼女の重たく充実した乳房が、豊かな感触を信介の腕に伝えてきた。

「織江——」

信介は、織江を背後からゆっくりと抱きしめた。織江は逆らわずに、まだ信介の胸の中で小さく笑い続けている。

「織江」

信介は彼女の甘い匂いのするうなじに唇をそつと触れながら言った。

「なによ」

「おれたち、もうそろそろ痩せがまんを放棄してもいい頃なんじゃないのか」

「どういう意味？ それ」

「わかつてるだろ」

「ええ」

織江は素直にうなずいた。

「わかつてる」

「じゃあ——」

「信介さん、いま、あたしが欲しい？」

「うん」

「本当に？」

「欲しい」

「だったらいいわ。好きなようにして」

織江は向きを変えて、信介の胸に顔を押しつけてきた。彼女の体は、すっぽりと信介の腕の中におさまった。温かい、張りのある乳房のやわらかさが、信介の肌に火照るように伝わってくる。

「愛して、なんて言う気はないの」

と、織江は小声で言った。

「あたしを好きで、そして、本当に抱きたいと感じてるんなら、そうしてちょうだい。あたし、昔みたいに欲ばりじゃなくなったのよ」

「好きだよ」

「そう」

織江は指で信介の首筋をやさしくなでながら、

「好き——か。便利な言葉よね。愛してるって誓うより、正直でいいと思うわ」

「どうしてそんなこと言い出すんだ、急に」

「だって——」

織江は目をあげて、信介をみつめた。

「あたし、これまでに何度も裏切られてきたから」

「おれは嘘ついてるわけじゃない」

「いいの。何も言わないで」

信介は織江の静かな口調に、ふと衝動的な欲望がしぼんでゆくを感じた。

「へんなやつだな」

と、彼はため息をついて言った。

「それじゃまるで、自分を犠牲にしておれに奉仕するような感じじゃないか。おれだって、いい気持ちほしくないぜ」

「そう？」

「そうだと。まだ人間のかけらは残ってるんだ、おれだって」

「ごめんね、おかしいこと言ってる」

織江は、かすかに笑った。今度は幾分やさしい笑い声だった。

「ね、信介さん」

「うん」

「こうしてるのって、とってもいい気持ちよ」

「おれもだ」

「どうして人間って、セックスなんかするんだろう。ふしぎに思えるわ」

「そうだな」

「裸になって、体を重ねあって、動物みたいな声をあげて、汗だくになって抱き合うのよね。その姿を頭の中で想像したら、なんだかとってもこっけいに思えてこない？」

「人間は悲劇的であると同時に、また喜劇的な存在でもある——って、緒方^{おがた}さんが言ってた」

「そうよね。かなしいのよね、人間は。それでいて、とっても愛すべき生きものなんだわ、人間というものは」

「おい、おい」

信介は体をおこして、織江の頭をこぶしで軽くこづいた。

「いつからそんな哲学者みたいなことを考えるようになったんだ、織江は」

「いつも考えてるわよ。口に出さないだけで誰だってそれぐらいは考えてるんだわ。べつに哲学者やインテリだけが人間のことを考えるわけじゃないでしょ」

「まいったなあ」

信介は苦笑して坐り直すと、腕組みして言った。

「さわってみろよ」

「え？ どこに」

「おれのものにさ」

「どうして」

「いいから、さわってみてくれ」

「こう？」

「どうだい」

「おかしいわ」

織江は指で信介の男性の部分に触れながら笑い出した。

「かわいい、こんなにちいちゃくなってしまうてる」

「あたりまえだ。すっかり気分がさめちまったじゃないか。きみがいい時に議論なんかおっぱじめるからさ」

「ごめんね、信介さん」

織江は指先で信介のその部分を、ちょんちょんとつつくと、体をおこした。

「作戦成功——」

「なんだい、そりゃ」

「信介さんが熱くなって、ちょっとやばいなって思ったから、さましてあげたの」

「え？」

「男の人って、物を考えはじめると欲望がさめるものなのよ。今夜はなんだかあたしのほうも危険だったから、工夫して逃げたわけ」

「ふーん」

「だって、やはり最初のとり決めは守ったほうが気持ちがいいでしょう。ヒット曲を出すまでは同志